「農民」から見た現代社会

私は「自分は農民である」ということに強い誇りを持っています。この「農民の視点」を述べたこの項目には、おそらく「私の本質」というか「本性」が強く表れていると思います。

私は生まれたときから農民の生活をして育っており、その関係で、学生時代から、たとえどのような仕事に就こうと「農民としての心」は常に自分の心の中心部に置き続けようと決意をして、そして濃淡の時期の差異はあれ、これまで一度たりともこの気持ちを変えないで過ごしてまいりました。ただそのことが私の人間性を狭小にしたり傲慢にしたり劣等感の原因にもなったりして、私の人生に良い影響を与えたばかりとは言えないのかもしれません。それでも「仕事は何」と聞かれた時には90%近くの割合でいつも「百姓」と答えてきました。

その理由は、農業はもっとも人間らしい仕事であるという意識と、それを示す人類の歴史への認識があること、そして「土」や「水」や「太陽の光」を前提として生まれた人類が、そのよって立つ最も基本的な産業である「農業」を軽視しては、人類の存続の基盤が崩れてしまうという確信があるからです。

もちろんそれ以前に私自身に「農業」のすばらしさが体や心の奥底に沁（し）みついているからであるともいえるでしょう。そこでまず「農業のすばらしさ」を列挙します。私が生粋の百姓の精神を持っていることがわかると思いますから。

① いつも「空気のきれいなところ」で生活や仕事ができる事。
② 「汗をかくこと」はスポーツするのと同様に気持ちが良い
③ 「四季折々の自然の美しさ」を目にすることが出来、まさしく清少納言の枕草子の「初段」のままの人生が送れる事
④ 農産物は「太陽と水と土の贈り物」であるということが名実ともに強く感じられて生きていける事
⑤ 生きとし生ける「植物や動物と対話」をしながら毎日がおくれる事
⑥ 「雨が降ったら基本的にはその日は休日」になること
⑦ お金があろうとなかろうと、基本的には日々「お金について計算をしなくても生活ができる」事
⑧ 野菜であれ果物であれタケノコやタラの芽や土筆のような副産物も含めて、「すべてが採りたての、新鮮なおいしさを味わえる」こと
⑨ 前の日に飲みすぎていたり遊び過ぎていたら「草の上に寝そべっていてもかまわない仕事」であること
⑩ たくさん取れた時など、「取りたての農産物を周りの人たちにただで配って」喜んでもらえる事
⑪ 隣の畑で働いている同業者と仕事に就いていろいろ話し合い、協力してもらえること
⑫ 農家には色々な伝統的な農事に起因するお祭りや「宴会がたくさんあって楽しめる」事
⑬ 腹が立つことがあっても「こんちくしょう」と土や木や水などに当たり散らかしても犯罪にならないこと
⑭ 「親子や夫婦で仲良く協力し合って働ける」こと
⑮ レースやラリーなどしなくてもトラクターなどの「農業機械で遊ぶことが出来る」事
⑯ いつでも休みを取って「魚釣りやドライブ」にでかけられる・・・畜産業やイチゴ農家などは毎日が勝負
⑰ 上司などから「がみがみ」言われなくても気ままに仕事ができること
⑱ 「多種多様なコメや野菜や果物」などが自由に育てられること
⑲ いざとなったらいつでも「農地を売り払って多少のお金をもって都会に逃げ込める」こと
⑳ 退職とかがないので「死ぬまで働ける」こと
㉑ 居住空間が広く、狭い場所での「騒音」などが気にならないこと
㉒ コンクリートやアスファルトと違って「畑の土」は人にやさしく、気持ちよく、はだしでも歩けること
㉓ 「酔っぱらっていても」畑仕事はできる事

㉔　畑では仕事をしながらいつも声を上げて「カラオケの練習」ができる事
㉕　燃えるごみは「何でも畑で焼くことが出来る」事・・・違法であるが
㉖　自分で自由に家や倉庫や部屋をつくることが出来る事
㉗　大工、左官、ペンキ屋などありとあらゆる仕事が自由に楽しめる事・・・つまり「クリエイティブな生活」ができること
㉘　車や機械などの大きなものでもほしいものはいつでも「なんでも保管できる」スペースがあること
㉙　いろいろな「犯罪物件」も土の中に隠せること・・・もちろんこれはジョーク
㉚　いろいろ工夫する能力は必要だが、何よりも「学校での成績が悪くても人並みに仕事ができる事」
㉛　「おおらかな心」を保ちながら「動物である人間らしい人生」がおくれる事・・・早い話が「ずぼらな性格」でもよいということ
㉜　「法事や慶事」に参加しやすいこと
㉝　畑でゴルフのスウィングやピッティングの練習などができること
㉞　夏の暑い季節では朝から早く働いて、暑くなる午前１０時から午後３時までは昼寝をして涼しくなるのを待って仕事ができること
㉟　繰り返しになりますが、肉体労働の中休みには多種多様の花やハゼの紅葉などを愛（め）でながらお茶が飲めること・・・都会で生活されている方にこのことがいかに素晴らしいかおわかりになれますか？今は秋です、昔は本当にそこらじゅうが美しかったです・・・しかし今は・・・
㊱　農業の仕事のきつさは、「老化防止の健康のための運動にちょうど良い」くらいです。確かに「腰」や「肩」は痛いのですが、私は学生時代からマッサージに通っていて、どうにかもてています。
※　農業のすばらしさはまだまだ語りつくせません・・・後日改定の際に追加いたします。（笑）。

バランスを欠かないように「農民の厳しさや大変さ」を列挙します。あくまでも私個人が感じたものです。
①　農業は産業社会やＩＴ社会では、生産性が低いために品物が安く、生活が成り立たないこと
②　肉体労働なので、体に負担がかかることもあるし、高齢になったらできない仕事も生じる
③　農産物は天候に左右されやすく、生活が安定しない
④　いろいろな虫や蛇（へび）やイノシシまでいるので畑は怖い・・・とくに虫を怖がる私にとっては。蜜柑を枯らしてしまうカミキリムシさえ扱えないのです。（笑）。カブトムシも怖いくらいです。なのに父は・・・
⑤　地元の同じ人たちと長いあいだ付き合い続けるのは、もし自分の性格に合わない人がいた場合などは人間関係で苦労すること
⑥　特に新しい考えや行動をしようとする人間にとっては、保守的で伝統を重視する農村社会は案外住みにくいこと
⑦　大学入学時に本音は「九州大学の農学部」に進学したかったのに、格好悪いという何の根拠もない上に、就職も最高であった農学部に入らないで、農政経済学を専攻しようとして「経済学部」に進学した私自身の愚かな見栄で理解いただけるように、「農業＝劣等産業」という偏見と闘う苦労・・・私だけの偏見だと思いますが・・・
※　あとはあまり見つかりません。仕事自体の苦労はどれでも同じで、そのことで大変だと思ったことは一度もありません。頭脳労働も事務労働も営業も畑仕事も海の仕事もどれも同じくらい大変であり、肉体労働であることについて不満を感じることはありません。それに「職業に貴賤（きせん＝良い悪い、尊い尊くない）はない」のであって、自分でしている仕事は嫌になったら、それを変えるのも一つの選択でしょうから。天職が厳しい時代ですが。

蜜柑販売用の看板をつくりました。志成館の授業も追い込み期で忙しく、ミカンも早く収穫しないとカラスに食べられてしまうし、早く販売してしまわないとくされてしまいます。ホームページも今年中に仕上げる予定でしたが、時間が足りない有様です。申し訳ありません。

ありがとうございます

今年のミカンは（夏に雨が多かったことや手入れ不足のために）見かけはよくありませんが(笑)、中身はいつもと同じです。ここから500メートル離れた日当たりのよい、南向きの、乾燥した土地で栽培していますので、甘いと思います。洗剤もワックスもかかっていないので、中身がジューシーで、長持ちするはずです。

昭和初期の天皇への「献上みかん」としてのこの地旧糟屋郡立花村の「立花みかん」の伝統を、近くの学習塾「志成館」の館長が、父母の意思を受け継いで頑張っています。

First Name Bases = ファーストネイム・ベイシズと農村社会

「ファーストネイム・ベイシズ」という言葉があります。「苗字（みょうじ）ではなく本名（ほんみょう）で呼び合う仲間たち」という意味です。「気の置けない間柄」と言ってもよいでしょう。私たち農民は子供のころからお互いに本名で呼び合っていました。男女の区別もなくみんな仲良く生活していたのです。おそらく日本中のどこでも、そして農業に限ることなく商店街でも漁師仲間や林業仲間でもそうなのかもしれません。同じ地域に住み、同じような仕事や生活をして、お互いに仲良く助け合っている仲間だから、自然と「本名で呼ぶ」ようになっているということです。

加えて江戸時代が終わったころには私の地域は１２戸ほどの農村集落であり、その後田分け（たわけ）（＝愚かというたわけの語源で分家という意味）を重ねて私の子供のころには６０戸ほどの集落になっていましたが、そのような理由から多くの人が同じ苗字であったことも、本名で呼ぶようになっている理由です。今の私のところは６００戸以上になっています。（ちなみに１９６０年頃までは当時の農村の集落は全て「部落（ぶらく）」と呼んでおり、運動会などでは「部落対抗駅伝」などと呼んで楽しんでいたのですが、ある法律ができた関係でこの言葉が使いにくくなっていることに悲しみと不自然さを感じているひとは多いと思いますが、いかがでしょうか。）明治の初めころに生まれた曾祖母といつもそんな話をしていたのですが、私が２０代のころには、この三代の地域だけではなく糟屋郡内や福岡市東区和白地区の多くの人たちが名実ともに「私の親せき」だったのです。

そんなわけで、名字で「阿部さん！！中野さん！！森さん！！」と呼ぶと、何人もが「えっ？なに？」と返事をするからです。（これも余談ですが、私の家の苗字は幼稚園のころまで「浦苧（うらお）」であり、古代から葦の葉が生い茂っていた海辺の沼沢地を著わす「由緒正しい？」苗字だったのですが、森家から婿養子に来ていた父が、「自分は戦国時代から４００年続く森出雲の守の直系である」といって無理やり苗字を森変えてしまっており、そのことに対する父に対する怒りはまだ収まっていません。一つには苗字は中学生や高校生の時の席順との関係で出会いの運命に影響するということから、もう一つには、私の地域の畑は「梅が浦」「柳が浦」「花の浦」などという「浦」がつく地名がとても多く、「浦苧」という苗字は昔のこの地域の地形や風景を著わすにふさわしい、まさしくその意味での由緒正しき農民の名前であると思っているからです。本当地域の歴史や民衆の風俗などに関心がない馬鹿おやじであると怒っています。といっても信頼しきった親子ですので、言葉の上だけの話なのですが（笑））。

その first name bases の関係は今でも続いております。数日前、地域のみんなで「ゴルフ・コンペ」をしたのですが、その打ち上げをしている時に、本名で呼ぶことの親近性そしてすばらしさを改めて強く自覚しました。ゆたかちゃん、しげたかちゃん、てつじちゃんなどと呼べることの嬉しさは、今のように個人が独立したというか分裂した時代には、何事にもかえられないほどの親しい意味合いを持っているのです。

農村社会だけでなく、ひろく地域社会で、たとえば同じマンションなどでも「本名で呼び合おう」という運動が始まるとよいと思っています。

「私の町とその変化」・・・日本中いや世界中が同じ様子だと思っています

　私は「福岡市」という３大都市圏から離れた、日本の地方でも比較的済みやすい「地方の中枢都市」とも呼ばれる中程度の都会、その行政区画から離れることほんの１キロ程度の、福岡市のすぐ近くの郊外に住んでいます。現在は日本でも数少ない「人口増加地域」と言われている「新宮町」の真ん中あたりです。そしてこの地域の社会の変化を６０年間見続けています。

　その過程で都市郊外の「真の姿の変化」を見続けてきました。おそらく江戸時代からつくられ続けたであろう「美しい里山」が発展しそして荒れ果てる６０年を見続けてきたということです。おそらく多くの方々は、都市近郊であるため「地価も高く」「通勤や通学にとても便利で」「とても住みやすい」と思っておられると思います。実際にその通りで、「住めば都」と言われるようにどの地方もそれぞれ魅力がありますが、特に私が住んでいる地域はとても住みやすいです。野菜も果実も多種多様で新鮮であり、鹿児島や宮崎からの鳥や豚や牛も安くておいしいし、近くにも多くの畜産業者や養鶏業者があってほんの２キロのところで毎日採卵したての卵を手に入れることもできます。また魚も種類も豊富で新鮮で安いのです。（ついでながら、春には釣り竿を持って近くの相島に出かけて「メバル」を釣りに行きますが、釣りたてのメバルのおいしさは何とも言えません）自然災害もとても少なく、空港も近く高速道路で大阪や鹿児島に向かうインターチェンジまで１０分もかかりません。おそらく都会の方は、こんな場所に住むのもいいのかなと考えられると思います。

　しかし「農民である私の眼」はそのような利便性ばかりを見てきてはいません。いつも授業中に子供たちに「昔はこの地域は美しかった」と話すのですが、それ程昔の方が良かったと本気で思っているのです。その理由は「高度成長の中で農民の意向は無視され、農業が破壊されると同時に、農地は荒らされ、連帯感や絆の喪失が生じ、ごみと汚れた土と、コンクリートの町が出来ていくことになじめなかったからだと思います。

　以下・・・このことについてこのホームページの別の項目にアップしていました文章をここでもアップします。

「大都市近郊はゴミ捨て場」

私の生活しているところから福岡市までは、直線距離で１ｋｍもありません。多くの方々は都市の近郊で、利便性もあり、緑の空間も多い快適な場所と考えておられると思います。確かに今の季節はいろいろな花が咲き乱れ、新緑もまばゆいばかりであます。先日話しましたように美しくてかわいい小鳥たちのさえずりが朝から楽しめます。そして子供のころは博多湾の和白干潟で潮干狩りをし、相島でメバルを釣り、つくしを摘み、タケノコを掘ってきて食べ、大好物の「タラの芽のてんぷら」を毎年大量に食べています。

とても快適なところと自慢したいのですが、しかし実際はそんな良いばかりのところではありません。経済学書にはきちんと書いてありますように、都市の郊外は、基本的には都市に労働力を提供し、都市の機能を効率的に運用するための補完的な空間であります。早い話が「大都市のゴミ捨て場」なのです。私たちの近くの住宅地やマンションが建っているところの多くが福岡市内の「地下鉄工事で出た土の捨て場所」ですし、国道３号沿いの道で草刈りをしていて草の中に捨てられていた清涼飲料水の瓶を弾き飛ばしたものが首に刺さって病院に駆け込んだこともあるくらいです。今でもあちらこちらに土を掘って都会のごみを埋めているところがたくさんあります。私はこれまで便利さが増す一方で少しずつ荒れ果てていく里山の姿をずっと見続けてきました。土地成金みたいなお金持ちが多くいると思われがちですが、そんな人はほとんどいません。一部の人を除いて、生活苦のために安い段階で土地を処分している人の方が多いのです。大きな家を建てていてもそれほど生活が豊かであるわけではないのです。

自宅の周りの荒れ果てた農地を見るたびに、日本中を旅してどこにでもある同じ光景が目に浮かび、何かもっとましな経済発展が望めなかったのかなあとあきらめというか絶望感に打ちひしがれることがたびたびあります。

田舎の人間は「お人好し」の面がありますが、どちらかというと古くさく保守的で、皆さんも仕事なされるときに、すぐに所有者意識を持ち出す交渉しにくい相手だと、感じられたことが多いかと思いますがいかがですか。地域の組織もいまだに「なあなあの世界」で、小説家の坂口安吾の言葉を借りれば「室町時代から何一つ変わっていない村社会そのものである」いうことを認めざるを得ません。ですから私は田舎の「村社会」の風習や発想はあまり好きではありません。

それでも都会の人たち、時代の主役を担っておられる人たちに、とりわけ若い世代の人たちに少しでも都市近郊の田舎の人達への暖かい思いやりを持っていただき、美しい里山を守り続けていただければありがたいと思って話しをいたしました。大都会である東京と福島県の田舎との関係は、福岡市の中心部と私たちの新宮町の地域との関係と全く同じなのだとつくづく感じます。

奥に見えるゴルフの練習場のネットの先が国道３号線。この写真のすこし左側の位置に私の家があります。昔はこの辺りは見事な水田があり、そののちには一面がミカン畑となっていました。今はごらんのとおりの荒れ地です。

「タケノコ畑」の写真を載せているのではありません。生まれた時から働いていた**私の家のドル箱ともいうべき見事なミカン畑の現在の姿**なのです(涙)
※タケノコは志成館の子供たちに分けています（笑）

清純で誇り高い橘（たちばな）の花の「姿」とその「香り」のすばらしさには感動が尽きません

農民としての森英行の生活　・・・以下は「私小説」になります

有名人の一人として、国会議員や福岡市長をされた山崎広太郎さんが、子供のころから学校に行く前には毎朝ソバ打ちをして父母を手伝い、そののち学校に通われ、兄弟で家を支えた努力家であることは彼を知る人は誰でもご存知だと思います。いつも通っているソラリアホテルに行くときには、地下街のかどっこにある、山崎市長さんによく似たお兄さんの店でそばをいただくことがあります。とてもおいしいです(笑)。ひろく世界中のどこの国でも「家業の手伝い」や「家の跡継ぎ」というのは、いろいろな意味で大変なものです。時には富豪として何不自由がない豊かな生活を送れる場合もありますが、それは極めて例外的なことで、「ひろく家柄の維持」や「職人としての技術の継承」やそして私のような「農民としての農地の維持」のような場合を含めて、ほとんどの場合は負担の方が大きく、人生を送るにあたっての「不自由な桎梏（しっこく＝手かせ足かせ＝拘束）として作用します。さらに家や親の考え方が古いと、その考えまでもが子供たちに重くのしかかってきます。素直に従える人間ないし子孫であればともかく、今の時代のように、基本的には個人が自由に生きることが出来る時代では、このような立場にいることは苦痛以外の何ものでもありません。島崎藤村や芥川龍之介がその小説でテーマにしてきたことであり、とりわけ太宰治にとってはその青森の旧家という主には彼の悲惨な人生を招いたということなどは、少しでも文学に興味がある方なら誰でもが知っている、古くからの永遠のテーマとなっています。日本では最近はこの種のテーマは時代遅れではやりませんが、儒教国家であるお隣の「韓国の現代ドラマ」では、まだこのことがテーマになっているストーリーがとても多いようです(笑)。私や私の隣人にはこれと同じ理由で苦しんだ、多くの隣人がいます。そして私もその中の一人でした。このことに関しては半分以上事実となる「小説」を欠こうと長い間感変えておりましたが、一つにはセンスがないことと、もう一つには時間がないこともあって、現在は開きためています。しかし書きたかったことを、ショートストーリーとして今から２～３時間でいくつかをここに書きます。多くの内容が自己弁護になっていますが、そのテーマは上に上げた島崎藤村や芥川龍之介そして太宰治たちの感受性とあまり変わらないと思っています。

＜農民たちの人生・・・その①＞

私たちの世代以前、具体的には昭和ヒトケタ世代に生まれた世代の農家の長男には「家の後を継ぐ」ことが最大の責務であり、他の選択の道はありませんでした。車の免許をとった学生のころから、多くの地域の農民の先輩ともいうべき人たちとの交流をしてきましたが、いつもそしてつくづく感じていたのが「どうしてこんな人が農業をしているのかなあ」という気持ちになることがとてもしばしばあったという話です。①感受性がとても強い方で、そもそも力仕事に向かい合に人がしばしばおられました。本を書いたり絵をかいたりするのがふさわしいのに、畑で汗まみれになって力仕事をされているのを見るのはとてもつらかったことを覚えています。②次に頭がとてもよく何事にもひらめきが早くて、およそ「のんびりと考えていてもよい農業」に向かない人たちです。農民がいろいろと方向性のない話をしている時に、いつもイライラされて、あきれ果てた視線で話し合いを見つめられていた人たちです。会社などの大きな組織に入っておられたらとても出世されただろうなといつも感じていました。③人と人との交渉術にたけておられる方もいましたし今もいますが、この人たちはどんな世界でもその能力の発揮ができるので、政治家や営業担当だとえらい出世をされるだろうと感じるのですが、そのような方々は農村社会でもそれなりの出世はされているので、特にどうこうと感じていませんがやはりほかの仕事の方が向いていたであろうと思ってはいます。④ほかにもありますが今は浮かびませんので後日の改定時に追加します。

＜農民たちの人生・・・その②＞

農民としての情熱や誇りを持っておられ、積極的な農業に挑んでおられた方々の人生。私が大学生のころ、私も含めて、多くのこの地域の農民は「ミカン農家」として大成し、豊かな農家を目指して積極的な投資をされ、そして懸命に働いておられました。私の家の本の数十メートルのところで農家をされていた方もそのうちの一人で、静岡の興津の農業学校に通われて、ミカン栽培の技術をしっかりと身につけておられる方がおられました。私はその方たちと自分の兄さんのように接し、教えをいただき、尊敬の念をもって生活をしていました。つまり私の将来の姿を体現するような模範的な農民として、頼もしい「日本の次の時代の農業の主役の一人である」と位置づけていたのです。しかし１９７０年からのジュースの輸入をはじめとする一連の農産物の自由化はこのような情熱溢れる農民に大きなダメージを与えました。作っても作ってもお金にならない蜜柑、かといって広大な畑を放棄するなどということは「百姓たましい」から譲れるわけがない。懸命に蜜柑造りを続けられたものの、結局は万策尽き、資金に追われて村を出ていかれました。私は自分の人生はこの方と同じにあると考えています。つまり私が父の意向に沿って農業高校に進学して、まじめな本物の農民を目指していたなら、自分の人生はこの方と全く同じになっていただろうという判断です。今でもこの方への敬意の念は一切消えておりません。実はこの方を主役と舌小説を書きたかったのです。とても優しく働き者で、謙虚で頭も私よりはるかに優秀な方です。農業を信じ、自民党や農政連を信じ、懸命に働いた結果が農業人生の破綻とは嘆かわしいことです。このことで先見性のない農民の悲劇と感じるのは簡単なことです。しかしトヨタやソニーそして東芝などの企業に従事している方や経営者にしっかりと認識してほしいのは、日本が機械産業の輸出という方向に政治の軸足を移した結果の犠牲者であるという認識を忘れてほしくないということです。自然自動車をはじめ機械製品をアメリカに輸出する政策のために、日本政府は農業を犠牲にして、広大な土地で生産される安いアメリカの農産品の購入に舵を切ったということを決して忘れてほしくないということなのです。これほど農民をないがしろにしている先進国は世界にあまりありません。そもそも資源に乏しい国なのですから、農業や畜産業をもっと大切にしないとこの国は破たんしますし、農業や里山の美しさで育つ「日本人の心」も維持できないと思っていますがいかがでしょうか。それなのに農民を馬鹿扱いする風潮への怒りは私の心の中から無くなることはないでしょう。もちろん各所に書いていますように、農業でこの国が維持できるなどとは考えてはおりません。しかしもう少し何らかの政策があったのではなかろうか、もう少し農業を大切にできなかったろうかという気持ちが消えないのです。実は上掲の写真にこの方が以前所有されていた広くて立派な農地が写っています。何ともまあ複雑な気持ちです。

＜農民たちの人生・・・その③＞

わたしの友人の友人に、九大の農学部を卒業して、名品「山川みかん」の生産と同時に「稲作」をされていた農民の方がいます。数度あったことがあり、福間の海に泳ぎに行ったこともあり、その時の写真を今も持っているのですが、私の４歳くらい年下のこの方も私のあこがれの農業人としてとても尊敬していました。まさしく「日本の主役になれる方である」という私の評価です。それから１０年もたたないうちに「件（くだん＝例）の大百姓は今どうしているの？」と友人に聞いてみたら、「今彼は森さんと同じように学習塾をしているよ」という返事が返ってきた時には相当にショックを受けました。私もそれなりの畑を持っていましたが、彼は私の２倍の農地を有する、エリート中のエリート農民だったからです。それに農薬の宣伝でテレビにも出たくらいの篤農家でありました。詳しいことはわかりませんが、自宅の農業倉庫を改良して、そこで塾をしているとのことで、それなりの生徒数の面倒を見ているということで一安心はしました。しかし私にとっては青天の霹靂であり、このことで日本の農家は、一部の大都市の農民以外は、農業で生計を立てることは不可能であると悟りました。この方は人望もあり、地域の市会議員をされているということなので、よかったなあと安どはしています。

<農民たちの人生・・・その④>

私と全く同世代の人たちで現在も懸命に農業をされている方たちもいます。この地域で専業農家をされている方は、都市近郊であるために、いくつかの借地や借家の賃貸収入がある方があり、生粋の農民とは言えないのかもしれませんがしかしそれでもすこしでもお金になるように、いろいろな品種の新しい蜜柑を懸命につくられており、私のような中途半端な似非農民から見れはとても尊敬するべきミカン農家であると思っています。その私が作ってきた蜜柑の種類は、早生や普通の温州、ネーブル、甘夏、八朔、宝来＝ニューサマーオレンジ、ポンカン、デコポン＝不知火そして最近のせとか、スイート・スプリングスなど多種類に及びます。（父母は晩年にはキュウイフルーツや巨峰も作っており、よく母を連れて田主丸までブドウの調査に通っていました。そして稼いだお金で懸命に固定資産税と健康保険税を払っていました（涙））それほどまでにあれこれを生産しないと生計が成り立たないのです。私の友人のゆたかちゃんは、これ以外にさらになつみ、みはや、西南の光、麗江、春姫、ゴールドキング、ゴールドクイーン、イタリア原産のブラッドオレンジ、多種類のネーブルや温州やポンカン、さらにレモンや柚、シークアーサー、カボス、ライム、すだちなどの香味蜜柑などここに書ききれないほどのミカンを栽培されています。すごいことですが、楽しみも多いことと思っています。

<農民たちの人生・・・その⑤自慢の息子>

上に「ミカン生産に挑んだものの農家として成功することはなかった」という話を載せましたが、世の中は良くしたもので、その中の一人の息子さんが大手新聞社の記者として活躍されています。福岡ではテレビにも出演されています。懸命に働く親の姿を見た子供は大成することが多いのですが、まさしく彼もそのうちの一人だと思います。お父さんはごく最近亡くなられたのですが、終生自慢の息子ということで、普通にはなかなかできない親孝行ができたことに感動を覚えています。私たちの地域でも、出世頭ともいえると思います。私もそのような人生をつくる予定でしたが（笑）、能力もなく努力も不足して思うような人生にはなっていないのかもしれません。そんな私にとっては最近になくうれしいニュースでした。お父さんも優秀で町内対抗の野球大会でもいろいろと活躍されていたと同時に、能無しの私たちのプレーに辟易されていた顔を今でも覚えています。

<農民たちの人生・・・その⑤私の場合その①>

自分の家の農業の後を継いで、なおかつ自分ができるほかの仕事はないだろうかと、大学と畑の往復をしていた学生時代の事です。「そうだ弁護士になるのが家にもいることが出来て、親孝行もでき、農業もできる」と単純に考えてしまいました。自分の頭の悪さ、特に論理的な思考に弱点があり、（その分感覚的な思考には自信があるのですが）（笑）、これで弁護士になろうなんて、「身の程知らずにも程があろう」というものです。それでも頑張りはじめました。しかし徹夜で勉強した朝に、父から「おーいいつまで寝ているのだ！！畑に行くぞ」と怒鳴られて畑に眠いままに行くような生活での司法試験の勉強は大変でした。しかも秋の大切な学習の時期、例えば大学での学習会、九大では「松法会」というのがあるのですが、その秋のころからミカン農家の農作業がドーンと増えて、夕刻の図書館での学習が絶頂の時に畑に行き、帰るのが少し遅れると怒鳴られるというような生活でしたので、勉強は楽ではありませんでした。いいわけでしかありませんが。そのために司法試験合格が無理だとは思ってもしかしほかに方法は私には考えられませんでした。

２８歳の時、猛烈な寒波が日本に訪れます。これで私たち親子が１０年以上かけて全力を尽くした広大な農地のミカンの多くの木が寒波で枯れてしまいました。これが転機になって、私は東京に学習をしに行き、他方で父も少し発想が変わり、新しい人生が始まりました。時はまさしくバブルのころでした。その後福岡に帰ったころ

には私は若くはありませんでしたので、結婚のために仕事をする必要もあり、そういう流れでとりあえず自分の家の財産を使って、自分の所有する３号線沿いのミカン畑を削って塾を開くことにしました。その後もミカン農家の跡取りとして、そして司法試験に挑み続ける受験生として、さらに責任ある塾の指導者としてこれまで生きてきました。今現在の時点で「もうこれ以上生きていかなくてもよいだろう」と妻に話すのですが、１０歳ほど若い妻なので、怒られてしまって、そんなことを言うべきではないだろうと反省しておとなしくしています。

悲しいことに、このような悲惨な農業生活を守ってきたゆえに、今でも農民であるという意識から離れられず、懸命に採算が取れもしない、蜜柑の畑を維持しているのです。およそ畑に行くのが似合わない妻や、仕事の相棒で講師の安永亜希子やその父親の力を借りてまで懸命に蜜柑をつくり続けています。その理由は、最初に述べたような「農業のすばらしさ」と縁を切ることが出来ないからなのでしょう。いろいろな仕事を見ていますが、もし農業での採算が取れるなら、農業が最高の仕事だと今も確信しているからなのです。それと共に自分を支えてくれる first name bases の友人たちがいることもおおきいのでしょう。それと同時に「農業を大切にしない日本の政治に対する怒り」を保ち続けるために執念として、採算がとれもしない蜜柑畑を持ち続けようとしているのかもしれません。また一部の畑には何も飢えていないのですが、その土地も「土」を汚染させたくないので、できるだけモンサント社の「ラウンドアップ」という殺草剤を使わないようにして畑を守っています。誰か畑を買ってくれる人がいたら、倉庫付きの便利の良い場所に６００坪あまりの農地がありますので買ってください(笑)。そうすると農業に見切りをつけることが出来るのかもしれませんが、確信は持てません(笑)。

＜農民たちの人生・・・その⑥私の場合その②＞

話が急に変わりますが、「農業よりもっと素晴らしい仕事」があるなら、それは「私塾」例えば現代では志成館のような個人の塾であると断言できます。毎日子供たちの元気な顔を見ていますと、まさに自分がたくさんの子供を持っているように感じられ、毎日うきうきと楽しめるからです。もちろん経営は厳しく、いつも納税滞納の常連で、経済的に楽なことはありませんが、それでももし、生活ができるなら、自分の信念や行動の形を変えないで生きていける私塾の経営は、農業よりももっと楽しい仕事であると感じ、今の仕事ができていることに父母や子供たちや保護者や地域の人たちにとても感謝しています。

農業について、また農民的な発想を、この「館長の社会論サイト」の各所に意図的に載せています。この最高の職業である農業の維持発展を願うとともに、私は人類存続のため欠かせない土と水と太陽を大切にしない現代人はそう長くない時期に破滅するという確信に近いものを持っており、その心の奥底にある次の時代への恐れが、この項の文章を書かせました。

<u>アル・ゴアの地球環境を守ろうとする闘いは、私たち小さな農民の多くの心に共通しているのです。</u>世界中の農民の心とつながっているのです。福島の農民の悲しみや怒りは、同業者である私たち農民の共通の怒りとしてやむことはありません。熊本の地震での農民の被災者の気持ちも、甘木朝倉地区の土地をなくした農民の絶望的な気持ちも、農業を守り豊かな自然を守ろうという気持ちで変わることはありません。

現代の多くの「土」を知らないそして「農」を知らない日本人や都会の政治家、特に傲慢な東京の政治家や企業家には地方の過疎地の農民の苦しみや、農地破壊の申告さや、人類が破滅に向かっていることへの切実な気持ちがわかるはずはないと批判したくもなります。「土」も「農」も今も毎日の生きるための前提になっているのにそのころを一顧だにしない人々の愚かさには空恐ろしいものを感じます。福島県民の苦しみをさておいて、オリンピックに興じるとは国家も東京市民もそしてスポンサーとなっている企業も「恥を知れ」と叫びたい国民は多いと思います。それ程までに農業は「人類の存続をかけて守るべき産業である」と考えるべきでしょう。車もテレビもスマートフォンもなくてもかまいませんが、美しい空気と水と汚染されていない土がなければ人類は生きていけないのです。世界中がそのことを理解しない限り、世界中の土地は汚染されつづけ、遺伝子組み換えによ

り世界中の農産品も家畜も魚も汚染され、やがて人類が汚染されていくことが見えないのでしょうか。
　そのような危機的な気持ちでこの項目を書き上げました。

３時間で一気にこの項の文章を書き上げました。誤字脱字意味不明の箇所が多いと思いますが、アップのための時間があまりないのでお許しください。後日訂正いたします。
この間ゆたかちゃんに電話をして、作っているミカンの種類を聞き出して、上の文章に入れています。
ありがとうございました。　　　　　　　　　　　　　　　　2017 年 11 月 23 日 (木)

私が持っている久留米田主丸の「果物の苗」の販売店のパンフレットです。蜜柑だけでもものすごい種類の苗があります。これでは消費者が一体なんという蜜柑を食べているのかわからなくなるかもしれません (笑)

自宅のおいしいジューンベリー

ジュ
です

ミカンの
作業便利帳
ナシの
作業便利帳

病虫害
花卉園芸

農業雑誌
農業経済
農業政策
現代農業
NATIONAL GEOGRAPHIC

＜農民たちの人生・・・その⑥　農民である私のものの考え方＞

昨日 2017 年 12 月 16 日にＮＨＫテレビで、裁判官であり弁護士でもあった故伊達秋雄さんの砂川裁判に関するドキュメントの放送を見ていました。私も「日本国憲法の平和主義」にあこがれ、真の平和を求めて法律の勉強をしていました。その過程で「伊達判決」も長沼訴訟での「福島判決」も「家永教科書訴訟」でもそして戸村一作さんたちの「成田闘争」でも、私はすべてで、反国家権力の立場を取り、裁判の最終結果や国の政策に納得してきませんでした。しかしだからと言って、私自身が反体制的か？反権力的か？左翼的思想家なのか？と問われた時に、単純に「はいそうです」と答えることが出来ません。確かに大学時代以降にも「マルクス経済学」を学び続けていますが、それは「近代経済学＝限界効用学派」の経済理論はおよそ「経済学」と呼ぶに値せず、お金ですべてを見ていこうという、私から見れば「人の心を失った経営学」にすぎないと考えているからであり、このことは資本主義経済学の大御所であるアダム・スミスの「道徳感情論」も同じ主張をしていると理解していることからも説明が尽きます。またカール・マルクスも「資本主義社会のペテンの構造を暴いた」だけで、それを乗り越えることに人生をかけましたが、その目的は叶うことなく、ある種の予言をして没しており、フリードリッヒ・エンゲルスの「剰余価値学説史」が明確な社会主義の政治形態を説いているとも思えません。その意味では社会主義の理想形も２１世紀の現在でもまだできているとは思っておりません。マルクスがまさか旧ソ連におけるようなスターリンの独裁体制を認めることはあり得ないことと考えており、そのような観点から、たとえ私が社会主義にある種の理想形があることは理解できていたとしても、およそ私が真の左翼主義者ないし革命論者であると言ってしまえば、これまで社会主義者としてまたは共産主義者として懸命に人生を過ごされてきた人たちに対して、大変失礼な言動であるだろうと考えています。自分が漠然とした反体制論者でもないことは、学生運動をはじめ、すべての政治運動にもかかわってこなかったことでも、大方の人はわかるであろうと思います。いつも考えることは「人は何と学ぼうとしないことか」「なんと歴史や時代の反省をしようとしないのか」「どうして自分や自社や自国の利益の事しか考えようとしないのか」という、人や社会に対する不信や苛立ちにまみれた、どっちつかずのはっきりしない人生を送ってきています。そして昨晩の番組を見ていてあまりにも遅きに失する感がありますがようやくはっきりと「どうして私が反権力的な価値判断をするのか」の理由が明確にわかるようになりました。それは「土に生き、太陽と水に生かされている、農民の心をなくせないから」なのです。虫や蛇を怖がる私は農業には向いていませんし、毎日の畑仕事ができる意思も気力も体力も精神力もありません。しかも私を農民にしようとし続けた父親に対しては、終生恨みを抱いていたようでもあります。だから断じて真の農民とは言えないし言う資格もないことはわかっています。しかしだからと言って都会人やビジネスマンや商売人でもありませんし、学者や知識人になれるだけの能力もありません。別掲の通り、地元の友人や知人たちはほとんどが保守的であり、体制的な立場の人たちであり、父に至っては福岡の昔からの右翼団体である玄洋社の流れをくむ保守的な立場で、「中野正剛の掛け軸」さえも自宅にあります。一般に農民はカール・マルクスが最も嫌うプチ・ブルであり、ルンペン・プロレタリアートと同じく労働者側から見れば裏切り者であるということも十分に理解しております。と言うのは、私の心は「弱い立場の人たちと共に生きていこう」というものでありながらも、ことあるタイミングで「自分は土地を持っているブルジョワである」などという気持ちが心の奥底から出てくることさえもあるのです。良くも悪くも「思想」という面から自分を見つめなおすと、哀れなプチ・ブルジョアの思想しかいまだに持ちえていないことに愕然とします。

現在では、昔のイギリスの滅びていったヨーマンリー＝独立自営農民的な「良心」をもって、この土も水も心も荒れ果てた資本主義社会の姿を見つめなおして、より公平で、より平等で、なおかつ自由な、資本主義社会を越えた望ましい社会の姿を残された人生で、「せめて考えることだけでも」していこうと思っています。

2017 年 12 月 17 日 (日) 12 時 9 分 42 秒

「私の本当の気持ち」

このホームページを見ている方は、私が裕福な人生を送ってきたかのように見えるかと思います。しかし私が裕福だったときはありません。いつも金銭に追われ、自由に使える金銭は、すべてが「借金」でした。ローン会社だけではなく、父母や先祖、地域社会や友人知人や優しい藤村先輩などに、多くの迷惑をかけてきました。それでも人並みの生活ができたのは、自分に子供がいないからなのです。ここが決定的なことなのです。

子供を育てるのには色々な責任や負担や不自由があります。子供を育てておられる方の立派さ、社会的責任の遂行の重み、経済的な戦いなどをなされている姿には、神々（こうごう）しさを感じています。私の正直な気持ちとして。（ですから私の塾の生徒には、常に保護者の立派さを子供たちに教え聞かせております。）

子供を育てるということ、その苦労、もちろんそれ以上の楽しみがあることは、塾という子供を育てる仕事をしていますので、わかっているつもりなのですが、子供を育てることの精神的そして経済的な負担がなければ、誰にでも私のような、一見は優雅な生活ができると思います。

そこで、どうして私が子供をつくり育てようとしなかったかを述べます。それは「自分が送ってきた、子供の時から青春時代までの苦労や悩みを、自分の子供にはさせたくない」と思ったからなのです。「楽ばかりして楽しみながら、なんという言い草だ」と友人や知人や地域の人たちには批判されるでしょう。しかし「人の内面＝心」は誰にでも、たとえ親であってもわからないと思います。さらに言えば、人の心をわかろうとする意識は、人としての傲慢さの表れ＝個人人格の尊重をしない態度である、とさえ考えています。心理学の教授や精神科の先生のように「学問」として人の心にかかわる方々はともかく、心理カウンセラーなどは、不安な心をもって生きている現代人には、実際の生活で必要だとも思えますが、私にはプライバシーをさらす、できることなら関わりたくない人たちであると考えています。それくらい頑固でどうしようもない人間であるからそのように考えるのだろうとも思ってはいます。それでも、今も、つまりたとえ跡継ぎや老後の自分の面倒を見てくれる人がいなくても、子供はほしいとは思いません。

もう一つの理由は、私が農民であることに起因しています。私は子供のころからの農民生活で、自然のすばらしさや農民のように自然に生きる人たちのおおらかで屈託のない長所をしっかりと見て育ってきました。そのような人間から見ると、いつもお金の計算をして生きていくような人生は耐えられないように思えるのです。何から何までお金を中心として動くような人生や世界にはもう関わりたくないという気持ちがずーっとあるからなのです。どんなに立派なことをしようとしても、その自分の心の裏に金銭問題があるように思うと耐えられないからなのです。お金のことなど考えずに、その日の生活が無事に終わり、しっかりと働き、おいしいものを食べ、隣人と語れる生活がしたいのです。明日のことなど考えずに。子供のような無責任な生き方であるし考え方であるという私への批判は正しいと思います。しかしまあ、自分を含めて、なんとあさましい「人間」という、いやしい、強欲で、身勝手な、自然環境破壊的で、好戦的な、非人間的な今の時代であるか、という絶望感の中でずーっと生活し生きてきました。もちろん信じられないほどの立派な人たちも多数みてきております。しかしそれでもこのような「人類」という生命体がそれほど長くこの地球上に存在しうるなどとは到底考えられないのです。このような時代に、自分の分身で自分が愛し、守らなければならない「子供」を産むことなどは、狂気の沙汰であると考えているからなのです。

おそらく多数の人々から私を見ると、奇人変人以外の何物でもないと言われるでしょう。しかし、本日２０１７年１２月２２日に出された政府の報告「今年生まれた日本人は９４万人で戦後最低であり、死者が１３４万人以上いるから、今年の人口の減少の人数は４０万人以上である」という事実は、この日本中に私のような人間がたくさんいることの証拠ではなかろうかと判断しています。

子供を欲しがっていた妻に対しては、お詫びしきれないほどの責任を感じつつも。

2017 年 12 月 23 日（土）

「島崎藤村や芥川龍之介などの自然派の文学者、青森の豪農の子供の太宰治の苦悩が理解できない人間とは、私は気持ちが通じることが出来ないだろう」

家父長制家族制度の、古い儒教的な価値観の中で生きていくことは、近代的な個人主義的な思想をもとにしている人間にとって、人生はたやすくはない。先祖ないし父母の、江戸時代、いや坂口安吾の言葉を借りるなら、「室町時代以降何も変わっていない、農村社会の儒教的価値観（これは今の保守的な政党である自民党についても言えることなのであるのだが)」と付き合っていくことは容易なことではない。多くの現代の都会に住む、新しい時代の人々には、「家」の重みを感じ、「責任」を追うことの苦労を理解することは容易なことではないと思う。このような私の表現の「意味が分からない、資本主義社会の、個人優先の社会を当然の事として受け入れ、生活をしている人々、現在の多数の人々」には、綿際の苦労、島崎の悩み、父母や家の名誉のためにもがき苦しんだ太宰の気持ち、そして家を守るために、能力以上の課題である、部ｂｂ越しになろうとして、好きでもない法律の勉強をして苦しんでいた、私の内心などわかるはずもないと思う。深い文学的な造詣がある人はともかく。私がホームページのこの項で書いている、一連の「農民の長男や長女の家をめぐる苦しみ」だ分りあえる人がいたら、朝まで共に飲み明かしたい。

２年前に青森の太宰治の邸宅を訪問した時に感じた太宰の深層に同情して

2017 年 12 月 28 日 (木)